

マックス・ウェーバー著、脇圭平訳「職業としての政治」を読む

- 政治家の条件を考える -

- ◆ 一体どんな資質があれば、彼はこの権力（個別的に見てそれがどんなに限られた権力であっても）にふさわしい人間に、また、権力が自分に課する責任に耐えうる人間になれるのか。どんな人間であれば、歴史の歯車に手を掛ける資格があるのか。 P.77
- ◆ 政治家にとっては、情熱(Leidenschaft) - - 責任感(Verantwortungsgefühl) - - 判断力(Augenmaß)の3つの資質が特に重要であるといえよう。  
 ここで情熱とは、事柄に即するという意味での情熱つまり「事柄ザッへ」（「仕事」、「問題」、「対象」、「現実」）への情熱的献身、その事柄を司っている神ないしデーモン(守護霊)への情熱的献身のことである。 P.77  
 情熱は、それが「仕事」への奉仕として責任性と結びつき、この仕事に対する責任性が行為の決定的な基準となった時に、はじめて政治家をつくり出す。  
 そしてそのためには判断力 - - これは政治家の決定的な心理的資質である - - が必要である。すなわち、精神を集中して冷静さを失わず現実をあるがままに受け止める能力、つまり事物と人間に対して距離を置いて見ることが必要である。
- ◆ 政治は頭脳で行うもので、身体や精神の他の部分で行うものではない。ではあるが、もし政治が軽薄な知的遊戯でなく、人間として真剣な行為であるべきなら、政治への献身は情熱からのみ生まれ、情熱によってのみ培われる。 P.78
- ◆ 政治的「人格の強靱さ」とは、何を措(お)いてもこうした資質を所有することである。ごく卑俗な虚栄心こそ一切の没主観的な献身と距離 - - この場合、自分自身に対する距離 - - にとって不倶戴天(ふぐたいてん)の敵である。 P.79  
 虚栄心とは、自分というものをできるだけ人目に立つように押し出したいという欲望のこと。 P.80
- ◆ 「仕事(ザッへ)」としての政治のエートス。 P.82
- ◆ 政治家にとって大切なのは将来と将来に対する責任である。 P.84
- ◆ 「剣をとる者は剣によって滅ぶ」（「マタイによる福音書」第26章）であって、闘争はどこでおこなわれようと、しょせん闘争である。 P.86
- ◆ 人は万事について、少なくとも志の上では、聖人でなければならぬ。キリストのごとく、使徒のごとく、聖フランチェスコのごとく生きねばならぬ。これが掟の意味である。これを貫き得たときこの倫理は意味のあるものとなり、(屈辱ではなく)品位の表現となる。 P.87

◆ まずもって私はこの心情倫理の背後にあるものの内容的な重みを問題とする。 P.102

◆ 結果に対するこの責任を痛切に感じ、責任倫理に従って行動する。

成熟した人間 - - 老若を問わない - - がある地点まで来て、「私としては、こうするよりほかない。私はここに踏み止まる」(ルッターの言葉)と言うなら、測り知れない感動を受ける。これは、人間的に純粹で、魂をゆり動かす情景である。なぜなら精神的に死んでいない限り、われわれ誰しも、いつかはこういう状態に立ちいたることがありうるからである。そのかぎりにおいて心情倫理と責任倫理は絶対的な対立ではなく、むしろ両々相俟(あいま)って「政治への天職」をもちうる真(エヒト)の人間をつくり出すのである。 P.103

◆ 政治とは、情熱と判断力の二つを駆使しながら、堅い板に力をこめてじわっじわっと穴をくり貫(ぬ)いていく作業である。もしこの世の中で不可能を目指して粘り強くアタックしないようでは、およそ可能なことの達成も覚束ないというのは、まったく正しく、あらゆる歴史上の経験がこれを証明している。しかし、これをなしうる人は指導者でなければならない。いや、指導者であるだけでなく、- - はなはだ素朴な意味での英雄でなければならない。そして、指導者や英雄でない場合でも、人はどんな希望の挫折にもめげない強い意志でいますぐ武装する必要がある。そうでないと、いま可能なことの貫徹もできないであろう。自分が世間に捧げようとするものに比べて、現実の世の中が - - 自分自身の立場から見て - - どんなに愚かであり、卑俗であっても断じて挫けない人間。どんな事態に直面しても「それにもかかわらず！」(デンノッホ)と言い切る自信のある人間。そういう人間だけが政治への「天職」(ベルーフ)を持つ。 P.106 ~ 107

マックス・ウェーバー著、脇圭平訳「職業としての政治」

岩波文庫、岩波書店 1980年3月17日刊

- 2006年9月12日記 -